

令和6年度 かながわコミュニティカレッジ講座 修了生インタビュー

「発達障がい児地域支援コーディネーター養成講座（実践編）」受講

講座実施団体：特定非営利活動法人びな・パートナーシップ・ひろば

困難を抱えた子どもたちのために、地域コーディネーターとして活躍する人材を育成し、公的な機関と連携した体制作りが目標です。様々な実践例や現状を通して子どもたちの置かれた困難さや状況を理解し、地域で発達障がい児たちへの支援の中心となって活動する人材となることを目指します。

今回、この講座の修了生である高森遼一さんに話を伺いました。

たかもり りょういち

高森 遼一さんプロフィール

神奈川県在住

幼稚園教諭・保育士歴13年、現在障がい児支援の分野に従事し3年。3歳の男の子の父親でもある。

自分の周りで「子どもに関する情報」があれば何でも、アンテナを張っていたのですが、偶然この講座のチラシとの出会いがありました。自分の知識のアップデートとスキルアップのため、そして保育・福祉の架け橋になれることがあればと受講しました。



◆保育者として講座に参加

「子どもに関わる全ての人が保育者※」という考えを大切にしています。

そもそも自分が子どもに携わる職に就いたきっかけは幼少期より、困り事を抱えた時に大人が誰も手を差し伸べてくれなかった過去がありました。あの時、自身の気持ちに寄り添い助けてくれる大人がいたら・・・という思いから、「よし、自分が困っている子どもたちを助ける大人になろう！」と決心したのです。

以前はイギリスの障がい児支援を学んでいたり、現地のナーサリーで直接支援を目の当たりにしました。その経験から発達障がい児に関しては大変興味がありました。

◆講座の内容は

カリキュラムは8回に分かれ、自己紹介に始まり、1回は支援のコーディネートや役割について、2～4回目までは医師や弁護士から困難な子どもたちの置かれた現状や支援を学び、6～8回目までは各団体の代表や公的機関の立場から活動を続けるための運営の仕方などを学びました。自分では3、4回目までは実践的に理解しているつもりでしたが、5回目以降は全く未知の分野でしたね。講座の切り口は、基礎的な「発達障がいとは」から入り、障がいの種類や特徴、子どもが直面する困り事などを時代背景から知る流れで、障がいに向き合う保護者の意識

改革もリアルに聞けました。児童精神科医、福祉司、弁護士など多方面の講師の方のお話が聞けたことも学びになりました。最終講義のあとに、この実り多かった講座の内容を自分なりに解釈、記し、身近な保育者にも伝えました。

◆講座の雰囲気は

応募者多数で抽選となったようですが、受講できたことは幸運でした。受講者は保育関係者、福祉団体の方、施設で働く方、当事者家族の方々など多岐にわたり、最初の自己紹介から実に盛り上がりました。初対面の人に自分の深いところまで話せているのは不思議な感覚でした。講師の方のお話を聞くだけでなく、ワークショップで意見交換も行いました。自分達も発信していんだというのは、すごく有難かったです。

「子ども」の話題になると皆さん、こうも熱く語られるかと思ったほどです。中には、話をしたことの安心感からか、涙ぐむ方までいらして、皆で味方になろうという一体感も生まれました。

そして、この講座では、毎回講義前にモーニング・アナウンスといって、自分の活動や情報提供を述べる時間がありました。最終日に自分が個人として「世界中の子どもたちに向けて絵を描いています」と発表すると、ある方がご自身のお子さんが描いた絵を見せてくれました。その方や何人かの受講生と連絡先を交換して、今も繋がりがあつたんですよ。講座を受けて終わりではなく、こうした繋がりが続いていくのもこの講座ならではの魅力だと感じています。



◆講座を振り返って

保育や福祉現場で忙しい毎日に追われていると、なかなかお会いする機会がない児童精神科医などのエキスパートの方々から、自分の固定概念を良い意味で壊され、新しい視点や気づきをもたらしていただきました。また、現場レベルでの保育者や支援者の知識不足や人材確保の問題点も明白に見えてきました。同時に支援を受ける側の子どもたちの選択肢の少なさにも直面しました。

印象に残ったことは、3回目の講座で「発達障がいとは、発達のアンバランスである」という言葉を聞いたことです。あらためて保育者や支援者が一人一人に合ったアセスメントや合理的配慮をしながら支援に繋げていくことが必要不可欠だと思いました。日本におけるインクルーシブ教育の在り方やニューロダイバーシティの概念についても深く学び、現場で実践していけたらと思います。

自分も含めて、人は障がいの有無に関係なく、必ず生きづらさを持っていると思います。何が障がいで、何が障がいではないという境界線を取り払うことが、これから

の日本の社会には必要と感じています。いや世界中で言える事です。

この講座の終了後には「もっと聞きたい！毎月、毎週講座があれば良いのに！」という名残惜しい気持ちが残りました。まだまだ専門的知識を身に着けたいです。それが説得力となり、更には子どもや保護者に対しての安心感に繋がると実感しましたから。

◆今後の活動

講座の後半で NPO の運営の講義を受け、いずれ自身でぜひ、子育て支援事業を立ち上げてみたいという思いも芽生えました。そして、もう 1 つ継続したい活動があります。それは息子が生まれたことをきっかけに、世界中の子どもたちに向けて色鉛筆を使った絵を描き始めました。私自身は色覚異常で色の区別がほとんど出来ませんし、絵を学んだこともありません。それでも子どもたちには「自分らしさを大切に生きてほしい」という願いがあり、絵で表現しています。2024 年にニューヨークの絵画チームとのご縁ができて、現地の画廊で自分の絵の展示を行いました。またご縁があり現在、日本の「歯医者」やニュージャージーの「子どもたちの絵画教室」に私の絵が飾られています。絵には、正解・不正解は無く、自由があります。子どもたちへ、絵を通じた感情や表現を伝える活動も並行して続けていきます。

◆講座を受ける方へのメッセージ

福祉関係者だけではなく、社会に生きづらさを感じていたり、自分自身の困りごと

を抱えて「どうすればよいのか」と考えている人は、ぜひともこの講座を受けてほしいです。きっと、悩んでいるのは自分一人だけではないとわかります。わからないことは質問すると、講師が親身になって対応してくれます。私は、具体的なアドバイスをストレートに受けたことが嬉しく、自分が限界だと思っていたことに、今後の展望が見えてきました。

あらためて子どもたちの未来を明るくして、日本の宝にしよう、見守っていこうと思います！

2025 年 令和 7 年 1 月 23 日取材

町田香子 レポーター



※「保育者」とは施設や場所に縛りなく、就学前の子ども達と関わっている人の事です。保育士や幼稚園教諭、乳児院や児童館など子どもに関わる仕事をしている人や、両親や親族など子どものお世話をしている保護者を総じて「保育者」と呼びます。